書評：葉國良『宋代金石學研究』

土屋　昌明

一

本書は、台湾大学中国文学部特任教授で学部長である葉國良博士の博士論文を修訂したものである。葉博士は、2008年11月22日に東アジア世界史センターの第2回国際シンポジウムで、「井真成墓誌」と「杜嗣先墓誌」にみえる「日本」国号をどう評価するか明確に論じ、その内容を本誌第2号に発表している(1)。本稿で葉博士の著書を紹介しようとするのは、この発表をふまえているので、その点から述べたい。

葉博士は当時、井真成墓誌にみえる「日本」国号の評価をめぐる日本の古代史研究者の態度に違和感を覚えたようである。というのは、日本の古代史研究者のなかには、中国の史書にみえる「日本」国号について、史書成立時期に使われていた名詞を遡って使った可能性は捨てきれないとし、「杜嗣先墓誌」にみえる「日本」という語についても、実物を見なければ信じられない、という立場の者がいたからである。葉博士はそこに、百年前の中国の歴史家と同様な疑古的態度を感じとったのであろう。葉博士の発表は、中華民国時期におこった中国古代史研究の方法論に関する問題から説き起こし、史書の記載にどのような態度をとるべきかを議している。すなわち、歴史家が記録した文献記述について、まず疑ってかかる態度か、それともまず信じる態度か、という問題である。前者は、古い歴史は後世の者から書き加えられた部分が増えるため、後の文献記述はより信頼性の置けないものとなる、という疑古的な態度であり、後者は、文献記述の誤りが証明できないのであれば、それを誤りだと仮定してはならず、同時期の文献と出土文献との照合によって、その記述がよりいっそう正しいことを証明できる、という王国維の二重証拠法の立場である。この問題について葉博士は、前者の立場の論理的矛盾を指摘しつつ後者の文明的価値を主張し、ついで両者の具体的な研究成果を比較して後者の優れている点を述べ、さらに新出文献による証拠で補強している。

葉博士はさらに歩を進め、王国維が甲骨文や金文を使った古代史の研究方法として述べた二重証拠法を、そこに限るのではなく、より広い範囲で採用すべきだと主張している。つまり二重証拠法は、古代史だけでなく歴史文献研究の普遍的方法論であり、出土材料には金文と甲骨文だけでなく、石刻などほかの材料も考慮できるし、研究分野もほかの分野に応用すべきなのである。

王国維は、この方法論を「古史新証」という論文で述べたが、さらに「宋代之金石学」という論文で、二重証拠法の萌芽がすでに宋代の金石学にみられ、その方法の応用性を示唆した。葉博士はその示唆を承けて、この発表で二重証拠法の有効性を論じた[2]。つまり、宋代の金石学は、二重証拠法という中国の伝統的な学術から生まれてきた方法論の母体である。本書は、その宋代の金石学を復元し、その特徴と学術的な価値を論じているのである。

二

以下、本書の梗概を紹介しよう。

第1章は緒論である。まず金石学の定義だが、本書は朱剣心（朱建新）の『金石学』によっている[3]。それによれば、金石学は中国歴代の金石の名義・形式・制度・沿革およびそこに刻された文字図像の体例・作風を研究し、経学・史学の文献を考証したり、文章のあり方を考察したり、芸術的な鑑賞に役立てたりする学問だという。その「金石」とは、金属器や石刻だけではなく、甲骨・陶器・封泥・簡牘や明器に至るあらゆる材料を含み、出土地も中国全土を扱い、金石とはいえないものも、金石という語で代表するとのことである。この定義には、朱剣心の当時すでに大量に出土していた甲骨を、金石として扱う不合理があるが、おそらく「刻」している点で石に通じるものだという意識が働いたのであろう。しかし、周知のように、現在は信じられないほどの数量の竹簡が出土しており、これもまた金石の名のもとに研究するとすれば、違和感は相当に強い。にもかかわらず本書が「金石学」という語を採用したのは、甲骨も簡牘もまだ研究対象になっていなかった宋代の学術を総括する目的だからである。

本書が宋代を扱うのは、金石学の興隆は北宋になってからだとの認識による。それ以前は金石に対して関心があっても、関連の記述が文献に散在するだけで、まとまった学術として専著にはなっていなかった。北宋の欧陽修が石碑の拓本を収集して『集古録跋尾』を執筆し、石碑の文字そのものを考察し、史書を考証し、拓本を鑑賞したのが金石学の開幕である。それ以前に碑文を好んだ者もいたが、作文の参考にするためにすぎなかった。また、北宋以後は金石を学術的に参照する風潮が一般化した。たとえば南宋になると、朱子のような儒者でも碑文を考慮するようになった。したがって、金石学の勃興の時期として、宋代が最重要とみなされるのである。宋代の金石学が盛んになった状況として、以下の四点が指摘されている。

①金石に関する著作が多い。

②記録にみえる金石器物の数量が多い。

③金石学者が多い。

④研究方法が確立された。

以下の章ではこの①～④が論述されるわけであるが、このうち、②については第1章の後半で、金石学関連の書籍のほか、随筆類を博捜して解明している。

第2章では、①と③について紙幅をとって解明している。まず③については、清の李遇孫『金石学録』と清の陸心源『金石学録補』に載せる200人の宋代金石学者の名簿以外に、各書から博捜した金石学者93人について小伝を作成し、可能な者は生卒年を割り出している。また①につい

ては、陳俊成『宋代金石学著述考』という前人の研究があり、それによって29種類があがっている。しかし、そのなかで闕名の『続考古図』と王黼撰とされる『博古図』については問題があり、本書はこの二書の作者と成書の時期・事情を詳細に考証している。また、宋代金石学の書物で亡失したものについては、1936年に楊殿珣が「宋代金石佚書目」を作成し、ついで容庚がその補編を作成して、89種類がわかっていた。本書はさらに23種類を見いだし、出典を明らかにしている。

第3章では、④のうち宋代における「金学」、つまり金属器に対する研究を総括する。第一に問題となるのは器制、つまり古来の名称と実物をどのように一致させようとしたかである。第二は器の用途に関する議論。第三は真贋の問題。第四は器の製作年代。制作年代の決定において、宋代の金石学は次の5つの方法をとったという。儒学経典や史書に載る人物に比定する、出土地点から推測する、暦法から推定する、歴史上の特殊な事件から推論する、標準器から比較する、という方法である。なかでも標準器から比較するのは近代に自覚された方法であり、それが宋代の金石学ですでにおこなわれていたことを、具体的な標準例をあげながら論証している。第五は解読の問題、つまり古文や篆書など書体の異なる字を読み解く方法である。第六は器物の紋様の名称と意味について。第七は命名の問題、つまり器物に銘文がないとき、どのように命名しているかということ。以上の七つの観点から宋代の金属器に対する研究の特徴を分析している。

第4章では、④のうち宋代の「石学」、つまり石刻資料の研究を総括する。第一に、石刻はまず文字の識別・解読が問題となる。そのためにはよい拓本が必要となる。そのうえで、宋代の金石学は書体や字体の難読をどう解決しようとしたか考察する。第二に、解読の例をあげてその方法を分析する。第三に、命名の問題。第四に、真偽の弁別について。その方法には、由来が疑わしい、筆画が書法史に適合しない、書法がその書家の風格に合致しない、内容に矛盾がある、という四種類がある。第五に、制作年代の問題。制作年代の決定において、宋代の石学は次の5つの方法をとったという。年号がわかって朝代がわからない場合は年数の多寡で不合理なものをはずす、暦法から推定する、地理の沿革から推定する、官職名から推定する、避忌字から推定する、という方法である。以上の観点を宋代の金石学者の言説から帰納して説明しており、例証は具体的で非常に興味深い。

第5章では議論の方向を転じて、宋代金石学と当時の学術の関係を論じている。当時の学術には経学（詩・三礼）・小学・史学（政治事件・伝記・官職・地理・譜牒・有職故実）・文学などがあり、金石学がこれらの学術にどのような貢献をしたかを例証している。また、礼楽器や度量衡器を製作するための金石学者の研究にも注意を向けている。さらに、書法・絵画・印章といった芸術への貢献についても例証している。

結論では、王国維の「宋代之金石学」でいうように、宋代金石学者がいわゆる二重証拠法をすでに実践していたとの指摘に賛同する。王国維によれば、宋代金石学者の学術的な成就が大きかったのは、政治的経済的に安定した環境がもたらした、彼らの教養の高さによる。その教養とは、鑑賞する意欲と研究する意欲の交錯、古いものを好む気持ちと新しいものを求める気持ちの交錯にあると。本書は、王国維のこの指摘を軸にして、各章で個別の事例を帰納的に論証しながら、宋代金石学の学術性の高さを証明するとともに、彼らの少なからぬ成果を我々が看過していることを示してきたのである。

三

じつは、本書は最新の研究成果ではない。この博士論文は1983年に書かれており、三十年近く前のものである。このように古い成果を出版することについては、当然ながら著者は懸念を持ったようである。しかし、最終的に出版を決めたのは、宋代金石学に関する大陸の研究が、最近に至るまで戦前の成果の域を出ないままであるからだと自序でいっている。というのは、金石学という伝統的学問は、大陸では戦後ずっと問題にされず、最近になってやっと学術史の観点から整理が進むようになってきたからである。そのような状況に置いてみると、むしろ三十年経って本書の必要性はより広範になったといえる。さらに言えば本書は、中国史で独自に発展しきたった歴史学の方法論に、近代的な客観的歴史学と同様な、あるいはそれを補うような方法と価値があることを主張している。

日本では、江戸時代の狩谷棭斎（1775〜1835）の『古京遺文』や西田直養（1793〜1885）の『金石年表』のような金石学の成果があり、金石学はある程度の発展をみせたのであった。しかし明治以降、西欧近代的な学問のディシプリンによって、金石学の扱っていた分野は細分化された。現在では、宋代の金石学は無論のこと、金石学という学問そのものがすでに消えかかっている。日本では、金石学が対象とする青銅器や石刻などは、考古学と歴史学・美術史の材料となっている。今ではほとんど、ある研究対象を検討するとき、有用な金石学の成果を取捨選択して参考にするか、ある研究対象の伝来に関する証言として参考にするかであって、金石学そのものに関心を向けることは少ない。比較的に金石学を重視するのは書道史研究である。著名な成果として、藤原楚水『書道金石学』（三省堂、1953年）や足立豊・石田肇『書道金石学』（同朋舎出版、『書学大系　研究篇』第五巻、1989年）がある[4]。とはいえ、これらは「書道」という語を冠していることでもわかるように、金石学のうちの文字書法にのみ関心を傾けている。その点では、これらも金石学を全体として継承するものではない。

そんな日本の学術界にとっては、金石学の全体的理解の必然性は相当低いのではあるが、それでも本書で述べられたことは決して疎遠なことではない、と私には思われる。2005年の井真成墓誌についての討論は、活字にたよる読書になれてしまったことを反省させられた。拓本をみて文字を追うことばかりに気をとられていたのもそうだ。墓誌というモノに関するごく素朴な疑問に答えられる用意がない、そんな研究態度だったことに忸怩たる思いがする、とある研究者がつぶやいたのを覚えている。その点では、井真成墓誌の討論は、実物資料に対する研究態度の問題にも大きな刺激になった。このような実物資料が問題になるとき、当該の実物は別のものだとしても、同様な問題が金石学ですでに討論されていたとすれば、それを無視するのは学術的態度といえない。本書で指摘するように、金石学の範疇は非常に広いので、そのすべてを吸収するのは無理だとしても、少なくとも現代に生かせる経験は生かすよう考慮するのがよいであろう。文字の読解の問題や実物資料の形式の問題などは、参考にすべき成果がとくに多い。用語や用例の問題なども、金石学の成果を参考にすべきかもしれない。たとえば井真成墓誌がそうだが、墓誌石と墓誌蓋に記された名称が異なる場合、どちらに準じてそれを命名するのか、といったような問題である。本書の第 4 章で指摘されているように、碑の場合は碑額にある名称を優先するが、墓誌

では墓誌蓋が碑額に相当すると考えるのか。こうした問題は、金石学ではそれなりの根拠があったはずで、それを批判的に継承したうえで新たな命名法を検討するのが最善なのであろう。

最後に強調しておきたいのは、本書の結論で引用された王国維の指摘への著者のこだわりである。つまり金石学は、王国維が西洋の科学的な学術を前にして見いだした、中国の古典的な学術の可能性の一つだったのであるが、そのような学術の優秀性は、宋代の学者の知的気風――鑑賞する意欲と研究する意欲の交錯、古いものを好む気持ちと新しいものを求める気持ちの交錯にあった。これは、孔子が「述べて作らず」と「信じて古を好む」をワンセットで語っていることにつながるのであろう。本書の該博な読書と厳密な論証の背後に、この知的気風と同様なものを感じるとともに、この点こそ、本稿の冒頭でふれたシンポで投げかけられた葉博士の意見に私たちが読みとるべきことではないかと私には思われるのである。

（書誌：葉國良著『宋代金石學研究』出土思想文物與文獻研究叢書39、台灣書房出版、2011年1月）

註

（1）葉國良「從二重證據法看「日本」國號在中國的出現」、専修大学社会知性開発研究センター『東アジア世界史研究センター年報』（第2号、2009年3月、59～70頁。丸井憲訳文、71～86頁）。

（2）上掲論文の注（6）および葉國良「二重證據法的省思」、葉國良・鄭吉雄・徐富昌編『出土文獻研究方法論文集　初集』（台灣大學出版中心、2005年9月、1～18頁）を参照。

（3）朱劍心『金石學』（藝文印書館、1940年）は戦前の金石学の代表作として民國叢書に収められている。

（4）柏書房『書の総合事典』（井垣清明・石田肇・伊藤文生・澤田雅弘・鈴木晴彦・高城弘一・土屋昌明編著、2010年11月）でも、とくに「金石学」の項は三名の執筆者によって5頁を費して詳しく述べている。